

目的 現在、中学校技術・家庭科における家庭系列への男子乗り入れの実施、高校家庭一般の男女共修問題等、男子の家庭科学習に対する社会の関心は急速に高まりつつある。家庭科が男女共に学習できる一般教科としてこれらの要請に応えていくためには、男女生徒の興味・関心、能力等を把握し、その上に立った指導内容・指導方法の検討が必要である。そこで、家庭生活における中学生の関心、能力等にみられる性差を心理学の立場から究明することを目的とした。

方法 昭和59年11月に大阪府東部の市立H中学校において、中学1年、男子115名、女子102名、計217名を対象に、質問紙による調査を行った。調査内容は家庭生活に対する関心、知識理解度、家庭生活事象に対する認識、生活と色などについてである。

結果 家庭生活に対する関心及び知識理解度は女子が高く、衣生活に関する内容に男女差がみられた。また、数量的判断力は男女とも関心が低かった。生活と色のイメージは、好きな色に性差がみられた。家庭生活事象のイメージ化として与えたセーター、卵、家という単語からの連想については、卵に性差はみられず、セーターは男子のイメージの広がりが小さかった。また、家については、男子に家の外部から内部へのイメージ化がみられた。家庭生活場面の認識については、男子が事実認識にとどまるのに対し、女子は生活的判断力、及び生活的発展がみられ、家庭生活に対する認識に男女差がみられた。

教科と性差の関係は、性差を認めて教科を考える方法と、性差をなくす方向で教科を考える方法が考えられるが、この点についてさらに検討が必要である。